2023年10月29日（日）主日朝礼拝説教

『あなたの宝は何？』　井上隆晶牧師
箴言2章1～8節、マタイ福音書13章44～52節

❶【イエス様が宝物】

今日、朗読した個所は天の国のたとえなのですが、ここに出てくる「**宝**」も「**高価な真珠**」も、実はイエス様のことを言っているのです。天国とか神の国といってもこの地上では見えませんし、見つけることはできません。「**神の国は見える形では来ない。ここにある、あそこにあると言えるものでもない。**」（ルカ17：20～21）とあるからです。しかしイエス様なら見つけることができるし、探すことができるのです。天の国はイエス様という畑の中に隠れていたのです。そこで主は宣教の初めに「**神の国は近づいた。**」（マルコ　1：15）と、ご自分のことを言われました。このイエス様に出会った人は天の国と出会ったのです。しかしすべての人が、イエス様を見て、その中に天国を感じたのではありませんでした。弟子たち、貧しい人たち、病人たち、罪人たち、十字架の強盗だけがこの方の中に神の国を見たのです。そして天国を感じた人はイエス様についてゆきました。

●10世紀にキーウ（キエフ）の大公ウラジーミルがまだ異教徒であった頃、彼は真実な宗教とは何であるのか知りたいと願い、家臣を世界中の国々へ派遣しました。家臣たちは最初にボルガのイスラム教徒のもとを訪れました。彼らはウラジーミルに「そこには喜びが全く感じられず、反対に悲哀に満ちていました。彼らの掟にはよい所がありません」と報告しました。ドイツとローマではそれなりに満足する礼拝の形を見つけましたが、祈りに美しさが欠けているのが不満でした。最終的に彼らはコンスタンチノープルに足を伸ばし、聖ソフィア大聖堂の礼拝に与り、ついに求めていたものを発見しました。「私たちは天にいるか地にいるのか分からないほどでした。この世にこれ以上の壮麗で美しいものはないでしょう。何といってお伝えしたらようか。…そこでは神が人々と共にいまし、彼らの礼拝は他の儀式をはるかに超えていました。私たちはその美しさを忘れることが出来ないのです。」こうしてウラジミールはキリスト教の中の正教を国教としてビザンチン帝国から導入することに決めたのです。

8世紀のコンスタンチノープルの総主教ゲルマヌスは「教会とは天の神が住み、息づくこの世にある天国である。」と言いましたが、キリスト教の礼拝は「天の国」の地上での表れなのです。私たちが賛美と祈りを捧げる時、最も人間らしくあり、獣から人間になります。特に聖礼典（サクラメント）を通じてキリストはその神秘的な姿を現します。そこには罪の赦しと復活（神の命）、神と人、人と人の一致が再現されます。キリストの業が現れる時、そこに同時に神の国が現れるのです。

このたとえの中で「**宝**」や「**高価な真珠**」を見つけた人たちは、「**持ち物をすっかり売り払って**」（マタイ 13：44、46）それを買っています。イエス様を見つけた人は、今までの人生のすべてを捨てても惜しくないという気持ちになるのです。実際パウロは「**私の主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失と見ています。キリストのゆえに、私はすべてを失いましたが、それらを塵あくたと見なしています。**」（フィリピ３：8）と言っています。

●2 世紀に小アジアのスミルナ教会の監督をしていたポリュカルポスという人がいます。彼は使徒ヨハネの弟子でした。役人たちはポリュカルポスがりっぱな人物である事を知り、改宗させて命を助けようとしますが、彼の固い決心を揺るがす事は出来ませんでした。執行官が最後のチャンスを与えようと「キリストを呪え、そうすれば助けよう。」と声をかけると「私は八十六年間キリストに従い続けてきましたが、あのお方はただの一度も私に不幸を与えることなく、恵みを与えて下さいました。こんなにまで私を愛してくださるお方を、どうして呪う事ができましょう。人は悪い方から良い方に変わることは善い事ですが、良い方から悪い方へ変わることは善くないことです。」といって彼は殉教しました。

人生の最後まで残る宝、そして来世にまで持って行くことのできる宝とは、キリストが下さる信仰であり、彼の死なない命です。この天の宝であるキリストを知る知恵は金の鉱脈のように、聖書の中に、教父たちの説教や修道院の祈祷書の中に埋まっていて、掘り尽くすことができません。このキリストという宝を皆さんがしっかりと知っていただきたいと思います。

❷【永遠に残るものと、残らないものを選別しなさい】

47 節からは次週のお話しと共通した内容なので、次週に話したいと思います。52 節に「**そこで、イエスは言われた。『だから、天の国のことを学んだ学者は皆、自分の倉から新しいものと、古いものを取り出す一家の主人に似ている。』**」とあります。自分の倉とは、自分自身のことです。私たちは「これはそのうち使うかもしれない」とか「これは良いものだから取って置こう」と言って、何でも自分の中に取り入れ、ゴミ屋敷のようになっていることがあります。だから時には大掃除をしなければなりません。教会でも大掃除をすると「これはいる、これはいらない」と選別をします。私たちも自分の中からいるものと、いらないものを選別しなければなりません。

●逢坂元吉郎の説教『終末と報い』から
終りの日については誰もうすうすその日があるように考えているのではなかろうか。人は何かしら曖昧な世界に立っている。それはなぜかというに、一方において人は神によって造られた永遠性を持ち、他方どうしても死なねばならぬという二つが交錯しているからである。一体この現世は実に不公平であって、人はこの世だけで正当な報いを受けるものではない。…そこで人はとかく現世さえよけれ

ば、来世はどうでもよいと考えやすい。現世ほど当てにならぬものはない。その移り変わりの急なることは、目ある者は正直に見るべしである。**この世が神の支配し給う世界である以上、歴史は自らが蒔いたものを時いたって刈り取らなければならない。これは厳粛な摂理の法則である。この世の営みがいかに力強く大きく見えても、それが根こそぎやられる時が来る。**…
教会はこの終末の審判と希望を宣べ伝えるところに立っている。…もし終末のことを考えないで、ただ現世のすぐ間に合うことを考えていたのでは、教会は意味をなさない。「願わくは御国を来たらせたまえ」との主の祈りの中の一節は、終末の来たらんことを祈ったものである。…われわれの教会があって御国があるのではない。**来るべき御国がある故に、われわれはこの地上にあってしばしの教会生活を形造っているのである。教会は御国の来る日までの準備として立っている。御国を待ち望むところの教会であるからして、教会は御国の一角である。…**
ここに不思議なのはキリストの再臨である。…最後はこの世のものではなく、神の創造世界が来るのである。故にこの世は結局聖徒の勝つ世界であり、今死んでいる者のやがて支配する世界である。ここにキリストの再臨の時まで粘り抜く信徒の忍耐の根源力がある。…**主キリストが再び来たり給う時、聖徒の面目において神の国を組織する市民となる者は誰ぞ。**

４世紀のアウグスティヌスはこう言っています。「滅びるものに私たちの心を捕らわれないようにしようではないか。滅びることのない確かな祝福を求めようではないか。私たちの地上の業を超えて空に飛ぼうではないか。蜂は蜜の量が増すと羽ばたきをますます必要とするのである。蜜の中に沈むと死ぬからである。」

（❊「羽ばたき」とは祈りの事です。）

天国に持って行けるものと、持って行けないもの、永遠に残るものと、残らないものがあることを知り、天国に持って行けないようなものはさっさと手放すことです。天国に持って行けないようなものに時間を使わない、関わらないようにしましょう。若い時のように時間があるわけではないのです。若い時は、永遠に残るものを捜さなければなりませんが、それを見つけ、学んだ人は、捜すのではなく決断をしなければなりません。永遠に残るもののために時間を使い、命を使いたいと思います。